

# 日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局  
 住所 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学  
 文学研究科 中村唯史研究室 気付  
 電話 075-753-6533 Email [robunkansai@gmail.com](mailto:robunkansai@gmail.com)  
 郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

## ◎秋季総会・研究発表会の報告

2020年12月12日(土)、オンライン(Zoom)により関西支部の秋季研究発表会ならびに総会が開催されました。

### 研究発表会

(1) 報告者: 中村唯史 氏

題目: 「本多秋五『戦争と平和』論をめぐって」

司会者: 高田映介 氏

(2) 報告者: 大平陽一 氏

題目: 「越境する『白夜』—ドストエフスキー作品のアダプテーションについてのケーススタディ—」

司会者: 坂中紀夫 氏

### 支部総会

1. 会員の異動(敬称略)

・支部変更(転入): 堀口大樹(東北支部から。京都大学)、高橋健一郎(北海道支部から。大阪大学)

・支部変更(転出): 松下隆志(北海道支部へ)、斎須直人(関東支部へ)

・退会者: 青木正博。会友の退会者: 小椋雄策、下郡健志

\* 関西支部顧問の山口巖氏が2020年9月29日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。本号に岡本崇男前支部長による追悼文を掲載いたしております。

2. 決算案と予算案の承認

資料に基づき事務局から説明があり異議無く承認された。

\* 既にお知らせしましたように、新型コロナウイルス感染拡大のために通常の支部活動が出来ないこと等を踏まえて「20-21会計年度(2020年9月～2021年8月)」の一年間に限って、全ての会員・会友に会費免除といたします。

3. 日本ロシア文学会の懸案事項について

・会員名簿について

日本ロシア文学会理事会に対して、関西支部からは、以下のように伝える。「基本的には氏名、所属(支部)、メールアドレス、出来れば専門も記載した名簿くらいはあった方が良いのではないかと。媒体に関しては個人情報保護等を踏まえ、理事会などで慎重に審議を願いたい。」

・東北支部の状況報告と今後の支部体制について

日本ロシア文学会理事会に対して、関西支部からは、以下のように伝える。「学会の規模からして、支部制度は廃止でも良いのではという意見もあったことも紹介しつつ、関西支部は、現時点ではまだ維持が危ぶまれる状況ではないので、基本的に存続を希望する。全国的な議論の中で、他支部との合同が求められる場合には、積極的に検討に応じる。」

・学生(修士)会員制度(仮称)の検討について

日本ロシア文学会理事会に対して、関西支部からは、以下のように伝える。「若手研究者を育成する観点から、積極的に賛成する。」

なお、関西支部においては、修士会員からの支部会費の徴収は免除しても良いかもしれない。

#### 4. 関西支部 2021 年春季総会・研究発表会の開催校について

・新型コロナウイルス感染拡大のため見通しが立たないが、「対面」で開催の場合には、京都大学文学部において開催と決定された。

#### 5. 選挙管理委員の承認

・木寺律子氏、中野悠希氏が異議無く承認された。

### ◎日本ロシア文学会理事会報告(支部長) (12月19日開催)

全国理事会が、12月19日(土)午後3時からオンラインで行われました。重要案件について、関西支部会員・会友の皆さんに情報を共有します。

#### 1. 学会費について

新たに事務局を担当されることになった秋山先生から、今年度の学会費はおおむね順調に納入されているが、まだ今年度分を未納入の学会員も一定程度いるとの報告がありました。

支部会費は今年度はいただきませんが、学会誌の発行や全国研究発表会の開催は、全国学会費によって支えられています。こちらの方を未納のかたは、ぜひ納入をお願いいたします。

#### 2. 2020 年度全国大会について

大阪大学で予定されていた今年度の全国大会は、新型コロナ・ウィルス禍の影響で、全面オンライン方式に切り替えられましたが、三谷会長から開催校の先生方に対して、切り替えまでの諸般の作業、また切り替え後も大会資料集の作成に尽力されたことにつき、謝意が表されました。

#### 3. 来年度の全国大会について

2021 年度の全国大会は筑波大学で開催されます。開催日は現在なお検討中ですが、10月下旬から11月中旬の土・日曜日となる予定です。オンラインになるか対面になるかは、今後の状況を注視する必要があるため、まだわかりません。なお来年度は会長選挙も実施の予定です。

#### 4. 助成について

「若手研究助成」と「国際交流助成」の募集が12月末から1月初めにかけて開始されます。詳しくは学会HPをご覧のうえ、皆さん積極的にご応募ください。

#### 5. 学会員名簿について

この件について、関西支部では運営委員会・総会の討議において、氏名・支部・所属・メールアドレス・専門程度の最小限の情報は、原則として会員間で共有すべきではないかという意見が大勢でしたので、理事会でもそのように説明しました。この件は今後も継続して審議されます。

#### 6. 支部制度について

主に会員減少の理由から他支部との統合を希望する支部が生じたのを受けて、関西支部でも運営委員会と総会で今後について話し合いましたが、①関西支部は当面は存続に支障がない、②もし今後他支部との統合案が出てきた場合には話し合いに応じる、との意見が大勢でしたので、その旨を理事会に報告しました。この件については今後、本部事務局と各支部長・事務局とからなる連絡会が意見交換や調整を行い、2021年7月の理事会に何らかの提案をすることになりました。

#### 7. 学生会員(修士会員)制度の創設について

修士課程生を対象に、年会費を一般会員の半額程度とする制度の創設について議論しました。関西支部会は積極的に賛同する旨を述べました。順調にいけば、2021年7月理事会を経て、総会で決定される予定です。

以上ご報告します。(ご意見等ございましたら、支部事務局の服部までお寄せください。)

### ◎追悼 山口巖氏

山口巖先生の訃報に接して

岡本崇男

12月11日の朝、関西支部顧問の山口巖先生が9月29日にお亡くなりになったことを知人からのメールで知った(享年86)。わたしが山口先生と出会ったのは、43年前のことである。わたしは神戸外大の院生で、先生が非常勤講師として担当されていた大学院のロシア語学演習を履修した。そして修士課程を終えて、週に二コマの非常勤講師と不定期のアルバイトで生活するようになった時に、古代ロシア研究会に誘っていただいたことが、わたしの研究方向を決めることになった。この点で、山口先生には大いに恩義を感じている。とは言っても、実はここ10年ほど先生には直接お目にかかっておらず、最後にメールのやりとりをしたのが古代ロシア研究会の50周年記号である『古代ロシア研究』23号に論文を寄稿していただいた2014年なので、かなりの不義理を働いていたことを告白しなければならぬ。その罪滅ぼしのためにも、僭越ながら山口先生のロシア文学会への功績について紹介、ついでに先生に関する若干の個人的な思い出を書こうと思う。

ロシア文学会が発行した文書に山口先生のお名前が出るのは、『日本ロシア文学会会報』第2号(1958年)の会員名簿からなので、おそらく入会は1957年だったと思われる。先生が京都大学文学部言語学科を卒業されたのが1957年なので、大学院に進学された年にロシア文学会に入られたことになる。先生は「自分の専門はロシア語学ではなく、言語学だ」と常々おっしゃっていたのだが、それはそれとして、学部の卒業論文でプーシキンの作品の言語現象を扱われたということなので、すでに専門家としての意識を持っておられたのだろう(ちなみに、1980年ごろまでは修士課程/博士前期の院生が学会に入ることは珍しくなかった)。

山口先生は1971年から1977年までと1981年から1989年までの二度、学会誌『ロシア語ロシア文学研究』の編集委員を務めておられる。また、1977年から1987年までロシア文学会の評議員(現在この役職はない)、1987年から1997年まで理事を歴任された。そして、1990年から1992年まで(あるいは1989-1991年)関西支部の支部長として、支部活動の活性化に着手された。特に、支部長を支える事務局の設置、現在の支部会報のプロトタイプである「連絡ニュース」の発行、そして支部顧問制度などが山口支部長の時に始まった。これ以降、事務局の仕事は増えるのだが、やがて情報技術が進歩したおかげで、事務作業の手間が省けるようになった(封書や葉書の宛名書きもする必要がなくなった)。

先にも述べたように、わたしは神戸外大の院生だった時に山口先生の授業を履修する機会を得た。当時、先生が教鞭を取られていたのは、本務校の京都大学教養部以外では、神戸市外国語大学だけだったのかもしれない。神戸外大のわたしの恩師の一人である久保二郎先生(故人)から聞いた話によれば、まだ大学院生だった山口先生の学会発表を久保先生が聞いて「しびれちゃった」(久保先生は東京育ちだった)ので非常勤講師として招いたということであった(全国大会だったのか、関西支部の発表会だったのか、そして久保先生が山口先生の研究の何に「しびれちゃった」のかは失念してしまった)。また、神戸外大ではわたしの学部・大学院の指導教授であった松川秀郎先生(故人)と大変親しくしておられた。

修士の1年目の授業は、A.V. Гладкий, И.А. Мельчук, Элементы математической лингвистики (Ленинград, 1969)の輪読であった。ただし、訳読ではなく、輪番で毎回5-7ページを要約するという形式だった(このペースだと一年で最後まで読めるし、実際にペースは山口先生のリーダーシップのもと、厳格に維持された)。ハンドアウトは必ず作成しなければならなかった。わたしは、集合などの数学の基本概念を耳にするだけで気後れしてしまうほうで、ある時、書かれている内容について「わかりますか」と先生に尋ねられて、

「はい」とも「いいえ」とも返答せずにヘラヘラと誤魔化していたら、「わからないなら、わからないとはっきり言ってくれないと困る」と大声で叱られた。またハンドアウトにもダメ出しがあった。大変疲れる授業だったのだが、文章を段落単位で理解し、ハンドアウトを作って、人前で報告する練習をさせてもらったことは、とても有り難い経験であった。

2年目の授業は A.V. Десницкая, Вопросы изучения родства индоевропейских языков (Москва-Ленинград, 1955) が教材であった。授業の進め方は1年目と同じだが、こちらは300ページを超える本なので、印欧語比較文法の研究史を扱った前半部だけを読んだはずなのだが、具体的にどのような内容であったのかについて、残念ながら全く記憶に残っていない。1年目の数理言語学概説ほどの「負の」刺激がなかったからなのかもしれない。やはり、教材はそれなりに骨の折れるものの方が効果がありそうだ。

山口先生は神戸外大の学部ロシア学科の授業も担当しておられ、ロシア語の動詞や名詞の文法範疇に関して講義されていた(ご本人曰く「日替わり定食」)。また、一度か二度、ロシア語の歴史について一年間お話をされたことがあったらしい。わたしは自分の必修科目の授業に出なくてはならなかったので、出席が叶わず、先生にどのような内容なのかお尋ねしたら、「読み切り講談です」としかおっしゃらなかった。ただ、その時、少し間合いを置いて、「君の大学には通史の授業がないからね」と指摘されたことが、後年わたしが神戸外大の教員になって講義を担当させてもらえるようになってから、ロシア語史、特に標準文章語史を扱う動機となった。ちなみに、後で分かったのだが、先生のロシア語史の授業はコトシーヒンあたりまでの、つまり17世紀前半ぐらいまでの文章語史と歴史文法を扱ったものだった。

山口先生が非常勤講師として神戸外大で教えておられたのは1982年度までで、それは山口先生に「しびれた」久保先生が1975年に退職され、親しくしておられた松川先生も1982年度いっぱい退職されることになったのを良い区切り

とされたらしい。山口先生曰く、「博士課程の学生であった自分に教える機会を与えてくれた神戸外大ロシア学科への恩義は果たした」ということであった。それ以降は大阪外国語大学で学部の講義や大学院の演習の授業を持たれていたようなので、わたしと同じように先生に絞られた覚えのある方がいらっしゃるのかもしれない。

結局、わたしはまともなロシア語通史の授業ができないまま神戸外大を退職してしまったが、山口先生はと言えば、『ロシア中世文法史』(1991年)でロシア語の歴史研究に区切りを打った後、内容類型学に研究の重点を移された。その当時は、次はロシア語史をまとめられるのかと期待をしていたのだが、そうならなかった。これは一見すると研究上の大きな方向転換のようにも思える。しかし、「言語は『もの』(エルゴン)ではなく、『はたらき』(エネルゲイア)である」というヴィルヘルム・フンボルトの考えを支持されていた山口先生にしてみれば、言語形式を生み出す目に見えない「力」を明らかにするために、言語形式を生み出す装置のモデルを探し求めているうちに、内容類型学に行き着いたのかもしれない。そうであれば、中世ロシア(正確に言うと16-18世紀の南西および北東ルーシ)における文法記述の変遷の中に文法家達の内省的判断を見ることも、やはり見えない力を知りたいという欲求の現れであったということができそうである。したがって、典型的な通史である「ロシア標準文章語史」(История русского литературного языка)のように、編著者の意図に基づいて構築される歴史を記述することには興味が湧かず、見切りをつけられたのであろう。

#### ◎支部事務局からのお願い

・春には次期の支部長などの選挙が実施されます。転居などの際には、どうぞ、支部事務局にも「新住所」をお知らせ下さい。メールアドレスの変更の際にも、是非、ご連絡をお願いいたします。

#### ◎次ページ以降に研究発表要旨を掲載 (発表者からの原稿をそのまま掲出)

## 本多秋五『戦争と平和』論をめぐって

中村唯史(京都大学)

後に『近代文学』同人として戦後日本文学に確固たる足跡を残すことになる批評家本多秋五(1908-2001)が太平洋戦争中に『戦争と平和』論の執筆に没頭していたことは、これまでも日本文学などの分野でしばしば言及されてきた事実である。1942(昭和17)年に『現代文学』誌4月号から12月号まで「戦争と平和」に就て」と題して連載、連載を断念せざるをえなくなった後も筆を折ることなく1943(昭和18)10月末に脱稿、終戦後の1947(昭和22)年に鎌倉文庫から刊行した経緯も比較的よく知られている。

だが、日本プロレタリア文学運動の末期に気鋭の批評家「高瀬太郎」として論陣を張った本多が、運動の崩壊後、しだいに戦時色が強まるなかで、「死んだあとには、せめて子供と原稿だけは残っていてほしい」(「鎌倉文庫初版はしがき」と、わざわざタイプ稿を4部作成するほどの切実な思いで、80年前のロシアで書かれた歴史小説に向き合ったのはなぜか。とりわけ本多が『戦争と平和』の哲学や構造について「ピエールの悟りのうえに「アウステルリッツの高い空」が懸っている」と文中でくり返したことの意味は、これまで十分には考察されてこなかったように思われる。

『戦争と平和』論は作品の展開を忠実に追い、一見ほとんどその再話であるかのような印象を与えるが、仔細に読むと、著者である本多の、おおむね次のようにまとめられる認識が浮かんでくる。

1)『戦争と平和』は「アウステルリッツ」と「ボロジノ」の2つの「山」を有し、両者は同型である。

2)「アウステルリッツの高い空」で示唆されたものは、作品のその後の展開に直接には関わらないが、ボロジノの戦いに際して回帰してくる。「ボロジノ」を経て、ピエール・ベズーホフは新たな境地(「ピエールの悟り」)に達している。

3)「ピエールの悟り」とは、世界を動かす「自然」「必然」「意志」——世界を動かす「未知の力」「盲目の力」——の在ることを認め、これに従って生きると選択すること(この「選択」が「自由」)の謂だが、作中で十分な説得力を帯びているとは言いがたい。

4)「ピエールの悟り」の上に、人事から懸絶した「アウステルリッツの高い空」が懸かっている。

——本多は「アウステルリッツの空」を、人間にとっての「未知の力」「必然」「自然」等の凝縮的な表現と位置づけていたことになる。

プロレタリア文学運動の崩壊と軍国主義の広がりという事態に直面して、それまで確信していた唯物史観に基づく人民革命への展望を失った本多が、「必然」(歴史を動かす法則)と「自由」(個の人為)との関係に思いを巡らすべく『戦争と平和』に取り組んだという定説には、疑問の余地がない。だが、『戦争と平和』論をめぐる諸論考において、「アウステルリッツの空」の問題は「ボロジノの領域」や「ピエールの悟り」の問題に内包されているので、後者を考察しさえすれば、『戦争と平和』論の意図に至れるかのような議論がこれまでしばしばなされてきたことについては、再考が必要である。上にまとめたような『戦争と平和』論の認識のうち第4のものが、意識的にせよ無意識にしろ、等閑視されてきたということだからだ。

これは本多自身にも理由のあることだ。本多は戦後、『戦争と平和』論が、自分が『歴史と文学』『無常といふ事』等の小林秀雄の戦時中の著作に表れた思考——「現実の絶対化」や「自然を[……]諦視する眼」(本多『小林秀雄論、同再論』)など——に惹かれていた時期に書かれたものであることを強調し、「絶対」や「自然」に相当する「アウステルリッツの空」よりも、「必然」と「自由」の相克を生きたピエールの軌跡の方を重視しようとする姿勢を示したのである。

けれども私たちは、本多自身のそのような言説にもかかわらず、「アウステルリッツの空」についてこそ考えてみなければならない。昭和10年代後半の文脈に即して見るとき、小林秀雄とは別の作家の文章と

『戦争と平和』論との関係が浮かび上がってくる。

それは坂口安吾のエッセイ「文学のふるさと」だ。赤ずきんが狼に食べられた場面で終わるペローの童話、懸想してさらって逃げた女を夜の間に鬼に食われた男が歌を詠んで泣く『伊勢物語』六段、農民作家が持ち込んで来た、間引きを題材とした小説のリアリティに疑問を呈したら、それは自分が実際にやったことだと言われ、茫然とした晩年の芥川龍之介の逸話などを例に挙げて、人為ではどうしようもないこれらの状況（「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」）を「ふるさと」と呼び、「文学はここから始まる」と主張したこの文章はよく知られているので、改めて詳述する必要はないだろう。柄谷行人はこの「文学のふるさと」を、人為を超えた「他なるもの」と的確に呼び換えている（柄谷「安吾その可能性の中心」）。

文中で言及している挿話の多くの、特に末尾を自己流に改変していることや、『伊勢物語』六段の題が「芥川」であることから龍之介晩年の逸話を連想したのだろう融通無碍にもかかわらず、人智や人為を超えたこの「ふるさと」に対する「意識・自覚のないところに文学があろうとは思われない。文学のモラルも、その社会性も」という安吾の言葉は、きわめて切実で真摯に響く。太平洋戦争開戦の半年前に発表されたこの文章は、否応なく必然としてのしかかってくる戦争と死という「絶対的な現実」に対峙するなかから書かれたのである。ただし安吾は、小林秀雄のように目前の「現実」を「絶対化」し、諦念をもって受け入れることで、安心立命の境地に立とうとはしていない。絶対的な「他なるもの」に触れ、人為ではどうしようもなく立ちつくすまさにその地点から翻って、文学や社会やモラルを構築していかなければならないと主張したのである。

「文学のふるさと」は、本多の「戦争と平和」に就て連載開始よりも10ヵ月早く、同じ『現代文学』誌1941(昭16)年6月号に掲載された。当時はまだ知己ではなかった安吾のこのエッセイを読んだ時の感動を、本多は後に「おれは批評家の卵で、おれの周囲には批評家の卵が何人もいるが、これだけの深みから発した文章を書いたものは一人もいない、おれも生涯に一度はこんなものを書いてみたいものだ、と私は思った」と回想している（本多『物語戦後文学史』）。

本多が『戦争と平和』について考え始めたのは1937(昭12)年末のことだから、彼のトルストイ論が「文学のふるさと」の影響下に書かれたというのとは違う。戦争の拡大と軍国主義の国民への浸透という膨大で必然的に見える「未知の力」を内面化することをいかにして拒み、これに対峙するかという同様の問題意識を抱えながら別々に展開してきた安吾と本多の論考のあいだに、ある種の共通性が認められるのはむしろ自然なことなのである。両者は、①人為を超越した、あるいは一切の人為の根底にある理解・表象不可能な「他なるもの」（安吾の言う「文学のふるさと」／本多の言う「アウステルリッツの空」に象徴される「未知の力」「盲目の力」——「そこ[盲目の力]があらゆる思想や芸術の発祥地である。歴史も哲学も政治も、悉くここへきて底を抜かれる」）の存在を認めたいうえで、②そこから翻ってモラルを構築しようとする身振り（安吾「ふるさとは我々のゆりかごではあるけれども、大人の仕事は、決して故郷へ帰ることではない[……]文学のモラルも、その社会性も、このふるさとの上に生育したものでなければ」／本多「自然」と「必然」を[……]どうにもならぬものと認めつつ、どうにもならぬ自我もまた一必然と、主体の自己固執性を改めて確認し、そうすることで「人間」と「自己」の回復に突き抜ける）、しかし③そのような身振りの先に具体的なヴィジョンが欠如ないし希薄であること（安吾の「大人の仕事」——たとえば『吹雪物語』——の破綻／本多が「ピエールの悟り」に説得力を認められなかったこと）などの点で同型的である。

戦時中、「現実」を「宿命」として受け入れるか、それともこれに対峙するかで、おのおの別個に小林秀雄と一線を画してきた安吾と本多の軌跡が、「昭和一〇年代の表通りの代表的な「文学界」に対し、裏通りの代表的雑誌（紅野敏郎）だった『現代文学』誌上で交差したのである。

## 〈発表要旨〉

## 越境する『白夜』

## ——ドストエフスキー小説のアダプテーションについて——

大平 陽一(天理大学)

ドストエフスキー初期の作品『白夜』を映画化した作品は、ロシア内外で10本以上もあるというが、発表において主として論じたのは、ヴィスコンティの《白夜》とブレッソンの《夢想家の四夜》である。アダプテーション研究においては、原作に忠実か否かを評価の基準にすべきではないとされる。しかし、昨今のアダプテーション論は、あまりにも原作の中心的役割を軽んじているようにも思われる。そこで本報告では原作小説の解釈の一形態としてのアダプテーションの可能性について、「夢想家」という人物像を中心に考えてみた。

## ルキーノ・ヴィスコンティの映画《白夜》(1957年)

ヴィスコンティによるアダプテーション《白夜》では、舞台が1950年代のイタリアの港町の冬に移され、主人公のマリオもシャイな夢想家からはほど遠い。しかし何より特筆すべきは、野外撮影を一切排し、スタジオセットで撮影されたことだろう。このセットは〈本当らしさ〉を目指しておらず、人工物であることをあえて隠していない。人工的なるがゆえに非現実的であり、映画に独特の幻想性を付与している。しかも、雨上がりの道路や運河への反映など、人工照明のもとでの撮影によってセットの幻想性がいや増している。夜が更けるにつれて降り始め、積もっていく雪が人工的な風景からさらに日常性、現実感を奪っていく様子は、白夜のもたらす幻想性とは別物であるにしても本作品の白眉であろう。

プロット面においてアダプテーションが原作小説『白夜』と大きく異なるのは、原作の「第二夜」に取り込まれている主人公の過去が全く語られないことである。ヴィスコンティによって切り捨てられたその過去とは夢想家としての体験であり、結果的にマリオは夢想家ではなくなっている。この変化は原作の解釈としては誤読であろうが、その一方で、セットでの撮影というヴィスコンティの独創によって、ひいてはセットの空間構造によって促されたものでもある。スタジオセットは、運河によって二つの世界に——すなわちナタリアが暮らす旧市街とマリオが暮らす新市街へと分割され、前者が〈記憶〉〈夢想〉のトポスであるのに対して、新市街は〈現在〉〈現実〉のトポスである。こうした空間構造に対応するように、記憶と夢想の世界の住人であるナタリアは、原作以上に夢みがちな乙女として造形される反面、新市街の住人マリオは〈リアリスト〉として造形されることになった。ナタリアの一途な恋物語を聞いて「女はみな頭が変なのか。一年前に別れた男をただ待つなんて」と呆れ、下宿人の約束を信じて疑わないナタリアに苛立って「妄想はやめろ」と怒鳴るマリオは、ナタリアよりも現実的な人物として描かれている。

## ロベール・ブレッソンの映画《夢想家の四夜》(1971年)

ブレッソンのアダプテーションにおいても、原作の設定に大きな変更がなされている:①舞台は現代のパリ。②主人公のジャックは自閉的な生活を送る画家。③彼には女性の跡をつけたり、妄想をテープレコ

ーダーに録音して聞き返したりする不審な行動が目立つ。

主人公を画家に変更した理由について、ブレッソンは「画家が画家である以上、画家の生活が孤独と内省の生活であるのは自明だ」と説明していちから、内省的な夢想家という人物像をより鮮明にすることに監督の意図はあったと見做せる。一方、小説の「夢想家」も視覚的な人間であることは、ことばの中に「顔つき」といった語がしばしば現れることに窺える。彼は人々の顔つきからその人の性格なり生活を思い描くのを習慣とし、自らの夢想の糧にしているのであり、ナースチェンカに向かってふるう彼の長広舌は、己の夢想を再話していることになる。

録音された自分の声を聞く再帰的な行為の前提には、主体の分裂が——物語る我と聞く我への分裂がある。ベームは、夢の中では意識が分裂すると——「経験している〈我〉と観察している〈我〉とが、夢を見ている間は截然と区別されている」と述べている。ベームの見方に従うならば、ジャックが自ら録音した夢想を再生して聞くことは、当然ながら原作小説には存在しない場面であるにもかかわらず、原作とは矛盾せず、むしろ夢想家に相応しいとさえ考えられる。

映画の最後、マルトとの訣別の翌朝にもジャックは録音する。ただし、それは夢想ではなく、前夜に経験したばかりの失恋の経緯である。原作の語り手同様、ジャックの中でも現実と夢想の境界は曖昧なのであろう。厳密に考えれば小説『白夜』は一人称叙述による〈内的独白〉であり、〈直接話法〉で提示されているナースチェンカの発言でさえ、夢想家よって再話されていることになる。しかも「第二夜」において断片的に示される主人公の過去は、ナースチェンカとの出会い、逢瀬、別離など白夜の体験と似ている。ベームは「ドストエフスキーは[...]殆ど幻覚のような夢が作品へと血肉化した」と述べ、『永遠の夫』を「夢の展開」と規定した。こうしたベームの見解は、ブレッソンによるアダプテーションにも当てはまるのではない。言い換えれば、ブレッソンの映画は原作小説の一つの解釈を——文学研究としては過剰解釈ではあってもアダプテーションには許容される類いの解釈を——提示しているように思われる。

### イヴァン・ピリエフの《白夜》(1959年)

ピリエフの《白夜》は、ブレッソンの《四夜》が原作の〈解釈〉を提示するアダプテーションだとするなら、〈絵解き〉としてのアダプテーションに過ぎない。原作をほぼ忠実になぞりつつも若干の変更を加えているのだが、そのどれもが的外れに思われる。たとえば、原作で具体的に語られることの少ない夢が、中世の遠い異国での冒険として映像化されているが、この変更は夢想家の内省的性格を否定するのみならず、白夜の恋物語とかけ離れた冒険譚は、相対的に前者をリアルに感じさせてしまうという結果を招来する。さらに興ざめなことに、年老いた夢想家を登場させて、若かりし日の恋物語を一種の枠物語として回想させている。このアダプテーションにおいては、回想の視点が年老いた夢想家に固定化された結果、外側の回想の枠と内側の夢想の枠が、現実の記憶と夢想の相互浸透を許さないほど堅固なものになっているのであり、夢想家の人物像が卑俗化、平板化されている。